国語（問題）

2025年度

〈R07192012〉

注意事項

1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。

2 問題は2～15ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

4 マーク解答用紙記入上の注意

（1）印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。

（2）マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	●良い	◐悪い	○悪い
マークを消す時	○良い	◐悪い	○悪い

5 記述解答用紙記入上の注意

（1）記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。

（2）所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

（3）受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9

6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

7 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。

8 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。

9 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

10 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

はかなくて、年も返りて治承四年にもなりぬ。春の初めに、珍しき事ども書き尽し難し。「位降りさせ給ひて、厳島の御幸あるべし。」などささめきあひたるも、夢の浮橋下りたる心地するに、如月の二十日余りにや、春宮に位譲り奉り給ひて、内侍所、神璽、宝剣渡し奉られし夜こそ、日来思し召しとりしことなれど、心細き御気色見えしか、宮人も限りなくあはれ尽きせざりしか。空の気色もかき曇り、残りの雪、庭もまだらにうちそそきて、暮れ方になりし程、上達部陣に集まりて、あるべき事ども、故き跡にまかせて行はれしに、宣旨承りて陣に出でて、御位譲りの事、左大臣仰せしを聞きて、1心ある人袖をうるほして、何となく思ひ続くること色に出でたる。その中にとりわき心ざし深き人にや、かくぞ思ひ続けける。

かきくらし降る春雨や白雲のおるる名残を空に惜しめる

時よくなりぬとて、何となくひしめきあひたり。弁内侍御佩刀(注1)取りて歩み出づ。清涼殿の西面に泰通の中将受け取る。備中の内侍、璽の筥取り出づ。隆房中将取りて、近衛司たち添ひて出づ。年来近く候ひて持ち扱ひし御佩刀、璽の筥今夜ばかりこそ手をも触れめと思ひ続けけん内侍の心の内、思ひやられてあはれなり。儲の君に位譲り奉りて、藐姑射の山(注2)の内も静かになど、2思し召すままなるべきだにあはれも多かるに、まして心ならずあはれなるらん。先々の有様、思ひやらる。

(中略)

宮の鶯声静かに囀りて、四方の山辺も霞籠め、春深き気色にも、旅の空、何となく世の中さまざまあやなく、別れを惜しむ輩多く聞ゆ。永き春日もはかなく暮れて、十七日に都を出させ給ふべきにてありしに、山の大衆なにくれと申すと聞えて、静かならざりしかば、今日は八条殿へ御門出とてあるべしとて、八条大宮の二位殿のもとへ御幸あり。何となく浪の浮すに揺られ歩きて、夢か夢にあらざるかとのみ、公私思ひあひたる。「名残もいかにと。あらぬ別れも。」など、あながちげに申したりける人のわりなさに、内裏へいとま申さんとて参りし便りに立ち入りて、「定めなき世の後れ先立つ例も。旅の空のあはれさ。」など、申しあはせつつ、朧なる月影ほのかにさし入りて、窓の梅の散りすぎたる梢に留まれる、名残ばかりに風の便りにほのめかしたる、言ひ尽し難し。程なく、夜もややふけぬる由、いさむる声に催されて、立ち出づるとて、書き付けける。

目の前に A ものは今はとて立ち出づる程の涙なりけり

思ひやれ都の空を眺めても八重の潮路の旅のあはれさ

八条殿へ「御幸急がるべし。」と聞ゆる御使参りなどしつつ、「慣らはせ給はぬ旅の空おぼつかなき。」など申させ給ひける。隆季大納言参りて、「御幸催し具して候ふ。」など、勧め申す。あはれに、御供すべき人みな舟に参るべしとて、草津といふ所に、平張(注3)打ちて、参り設けたり。隋帝の錦の纜にて繋ぎたりけん舟には変りたれども、心異にひきつくろひたり。

(源通親『高倉院厳島御幸記』による)

(注1) 御佩刀……宝剣のこと。
(注2) 藐姑射の山……上皇の御所を指す。
(注3) 平張……仮屋を作る時の幕の張り方。

問一 二重傍線部①～⑤の助動詞が表す意味の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ	① 当然	② 推量	③ 可能	④ 推量	⑤ 命令
ロ	① 適当	② 当然	③ 当然	④ 命令	⑤ 推量
ハ	① 推量	② 当然	③ 当然	④ 適当	⑤ 命令
ニ	① 推量	② 当然	③ 適当	④ 適当	⑤ 推量
ホ	① 当然	② 推量	③ 可能	④ 命令	⑤ 命令

問二　傍線部a「奉ら」、c「給ひ」の敬意の対象として、最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ（同一のものを選択してもよい）。

イ　春宮
ロ　上皇
ハ　弁内侍
ニ　左大臣
ホ　御使

問三　傍線部1「心ある人」の表す内容として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　自身の悲しい感情を隠せない人
ロ　上皇の気持ちを理解している人
ハ　風雅をよく理解する心のある人
ニ　仏教の教えに深く通じている人
ホ　物事の道理をわきまえている人

問四　傍線部2「思し召すままなるべきだにあはれも多かる」の表す内容として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　位を譲るための儀式は賑やかだが、せめて御所の内だけでも長閑に過ごしたいとお思いになることは、愛おしく思われる。
ロ　天皇が春宮に位をお譲りになって、御所の内も静かになるだろうとお考えになる通りになるのでさえ、寂しく思われる。
ハ　位を譲る儀式も一通り終わって、御所の内も寂しくなることだろうと思っていらっしゃる状態でさえ、趣深く思われる。
ニ　春宮に位を譲り終わったので、思いのままに穏やかに御所の内で過ごそうとお考えになることは、風情のあることと思われる。
ホ　天皇の位をお降りになって、せめて御所の内だけは思い通りに過ごしたいとお考えになることは、気の毒にも思われる。

問五　傍線部b「あやなく」の指す内容として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　訳が分からない様子で
ロ　不審そうである様子で
ハ　驚き慌てている様子で
ニ　不安に思われる様子で
ホ　名残惜しそうな様子で

問六　空欄 A に入る語句として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　ながるる
ロ　ながむる
ハ　みゆらん
ニ　さりゆく
ホ　とまらぬ

問七　本文の内容に**合致しない**ものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　厳島に向けて舟で出発する前に、高倉院は八条大宮の二位殿のもとへ御幸して対面した。

ロ　高倉院の譲位と新帝の即位については、周りの人々は喜びよりも悲しみを多く感じていた。

ハ　ある女房が今生の別れになるかもしれないと不安がるので、筆者は会いに行き、別れを惜しんだ。

ニ　高倉院は春宮に譲位したが、それは高倉院の意に反して無理矢理とり行われたことであった。

ホ　厳島への御幸を前にして、周りの人々は世の先行きがわからず、不安で落ち着かなかった。

（二）次の文章は、書いた詩の内容が原因で逮捕・投獄された兄蘇軾のために、弟の蘇轍が時の皇帝に送った嘆願書の一部である。これを読んで、あとの問いに答えよ（設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

臣早失二怙恃一、惟兄軾一人相須為レ命。今者窃聞二其得レ罪、逮捕赴レ獄、挙レ家驚号、憂在不測。

臣窃思念軾居レ家在レ官、無二大過悪一。惟是賦性愚直、好談二古今一得失一、前後上レ章論レ事、其言不レ一、陛下聖徳広大、不レ加二譴責一。軾狂狷寡レ慮、窃恃二天地包含之恩一、不二自抑畏一。頃年通判杭州及知密州日、毎レ遇レ物托レ興、作二為歌詩一、語或軽発。向者曾経二臣寮繳進一、陛下置而不レ問。軾感二荷恩貸一、自レ此深自悔レ咎、不二敢復有一レ所レ為、但其旧詩已自伝播。臣誠二哀下一軾愚於自信、不知文字軽易、迹渉不遜、雖二改レ過自新一、而已陥二於刑辟一、不レ可二救止一。

昔漢淳于公得レ罪、其女子緹縈請下没レ官婢一、以贖中其父上。漢文因レ之遂罷二肉刑一。今臣螻蟻之誠、雖万万不及緹縈、而陛下聡明仁聖、過二於漢文一遠甚。臣欲レ乞下納二在身官一以贖中兄軾上。非四敢望三末二減其罪一、但得レ免二下レ獄死一為レ幸。兄軾所レ犯、若顕有二文字一、必不二敢拒抗一、不レ承、以重得レ罪。若蒙二陛下哀憐一、赦二其万死一、使レ得レ出二於牢獄一、則死而復生。宜何以報。臣願与二兄軾一、洗レ心改レ過、粉骨報効、惟陛下所レ使、死而後已。

（清・沈徳潜『唐宋八大家文読本』による）

注
怙恃……両親。　狂狷……常識はずれで片意地なこと。　通判杭州及知密州日……杭州副知事と密州知事の在任中。
臣寮繳進……ここでは、とある官僚が軾の詩集を進呈したの意。　刑辟……刑罰。　漢淳于公……前漢の淳于意。
緹縈……淳于意の娘の名。　没……全てを没収されること。　漢文……漢の文帝。　螻蟻之誠……取るに足らない者の誠意。
末減……減刑。　報効……恩に報いて力を尽くすこと。

問八　傍線部1「憂在不測」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　混乱のあまり心配が次々沸き起こり生きた心地がしない。
ロ　一家の心配ははかりしれないくらいに増えつづけていく。
ハ　兄が獄中で死ぬようなことになりはしないか心配である。
ニ　家族に大きな累が及ぶのではないかと非常に不安である。
ホ　兄の身にいったい何が起こったのか皆目見当がつかない。

問九　傍線部2「軾愚……不遜」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　兄の軾は自ら信ずるところに愚直で、書いたものは人から人へとすぐに伝わり、尾ひれがついて正しく伝わらないこともあることを理解しなかった。

ロ　兄の軾は自らの信念にあまりに愚直すぎ、そのうえ軽はずみに詩や文を書いたため、時として不敬な内容に及ぶことがあったことも分からなかった。

ハ　兄の軾は愚かにも自信過剰で、書いた詩文が飛ぶように巷間に伝播するとは知らず、そのため不敬な表現を書いても一切はばかるところがなかった。

ニ　兄の軾は愚直なところがあり自信過剰で、詩文の表現に浮ついたところがあり、時に皇帝を批判する部分が含まれていたことにさえ気づかなかった。

ホ　兄の軾には自信過剰という愚かさがあり、加えて、書いた詩文を慎重に推敲することも知らなかったため、尊大な言葉遣いになることが間々あった。

問十　傍線部3「雖万万不及縲縶」は「絶対に縲縶にかなわないけれども」の意味となる。この意味に沿って、記述解答用紙の**問十**の白文に返り点を記せ。ただし、送り仮名は記さないこと。

問十一　傍線部4「宜何以報」の読み方として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　なにをかむべなるむくゆるをもつてせん

ロ　よろしくなにをもつてむくゆべけん

ハ　なんぞむべなるをもつてむくいん

ニ　いかんぞむくゆるにむべなる

ホ　いづくにかもつてむくゆるによろしからん

問十二　本文の内容に**合致しない**ものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　漢の文帝の時代に淳于意が捕らえられた時、娘の緹縈が我が身を下女に落とすことで父の罪を贖うことを乞い、文帝を翻意させた故事を引いて、蘇轍は皇帝に兄の救済を求めた。

ロ　兄の軾は身柄を拘束され投獄されたこの一件の前に、一度告発されたことがあったが、その際は陛下の寛大なはからいにより事なきを得た。

ハ　もし兄軾の罪を赦してくれたならば、蘇轍は現職の官をすべて返上するばかりか、自身の死をもって兄の罪を贖いたいとまで願い出た。

ニ　旧作が勝手に世間に広まってしまってはいるが、現在の兄は軽率さを悔い改め、時政批判の詩は一切作っていないと蘇轍は強調した。

ホ　蘇轍は、減刑を求めることがこの書簡の目的ではなく、肉親が兄一人となった弟の立場から、兄が獄中で死ぬことだけは赦してほしいと記している。

ヘ　兄の軾は性格が真っ直ぐで、かつて度々意見書を呈上し、時政について批判意見を述べたが、皇帝はそれを咎めなかった。

（三）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

※この部分は、著作権の関係により掲載ができません。

※この部分は、著作権の関係により掲載ができません。

問十三　傍線部A・Bにあてはまる漢字二字を、それぞれ記述解答用紙の**問十三**の欄に楷書で記入せよ。

問十四　本文には、次の一文が脱落している。本来入るべき場所として最も適切なものを**【イ】**～**【ホ】**の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

このように、場所感覚は一定の社会集団で共有され、それによって場所が境界化され、秩序化されるのである。

問十五　傍線部1「宗教は場所の固有性と関わらない普遍的な真理と信仰ではあるが、場所と密接に関係している」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　現代のようなグローバル時代においては信仰を持つ人びとの移動が容易になり、聖地が地理的規模に制限されなくなったから。

ロ　宗教は本来的に地理的な場所とは関係ないが、誰もがその土地固有の神を選ぶことができるから。

ハ　モスクや教会等の宗教施設は、信者にとって愛着ある場所であっても、万人に開かれた場所でもあるから。

ニ　聖地は、信者を媒介することによって価値付けられる一方で、信仰とは異なる意味付けがなされる場所でもあるから。

ホ　宗教施設や聖地は、その宗教の教義を共有する人びとによって価値付けられた象徴的な場所でもあるから。

問十六　空欄 X に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　場所感覚を拡張する力
ロ　内部と外部を作り出す力
ハ　同質性と異質性を調整する力
ニ　外部を支配する力
ホ　秩序を再構築する力

問十七　傍線部2「より重要な、その同じ場所についての理解を覆い隠してしまうこともある」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　人々に特定の場所感覚だけが支持されると、その場所が経験してきた「不都合」な歴史が消えてしまうから。
ロ　同質化による場所感覚の生成によって、多数派の価値観を有する支配者だけに権力が集中するから。
ハ　境界化によって内部が同質化されると、権力の比重によっては社会的な場所感覚のあり方に偏りが生じるから。
ニ　社会的な場所感覚は、植民地主義のように権力構造の根底にあるものと見なすことができるから。
ホ　オリエンタリズムの論理のように、権力は場所についての異なる解釈や場所感覚を消し去ってしまうから。

問十八　空欄 Y および Z に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　Y 地縁　Z 血縁
ロ　Y モダン　Z プレモダン
ハ　Y 局所性　Z 永続性
ニ　Y ナショナル　Z ローカル
ホ　Y 通時性　Z 共時性

問十九　傍線部3「国家への帰属意識は決して自然ではなく、社会的に「想像」されたものである」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　前近代の地縁的な地理的区画とは異なり、国境の画定によって人為的に境界化され、秩序化された近代国家像について、多くの人びとが幻想を抱いているということ。
ロ　近代国家になり政治家と行政役人によって制度化され、秩序化された地理的区画があたかも人びとが作り上げた国家だと思い込まされているということ。
ハ　近代国家は条約によって画定された地理的区画にすぎず、場所感覚は社会全体が共有する同一の価値意識を人びとに強要しているということ。
ニ　国家への帰属意識は、近代中央集権体制による同質化の結果であり、権力によって強制的にもたらされた実体のない場所感覚であるということ。
ホ　国家への帰属意識は、近代社会における行政組織や法制度等が基盤となって生じた場所感覚として、人びとの観念の中で共有されたものであるということ。

問二十　本文の内容に合致するものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　安全保障への意識が強まると沖縄県の独自の文化や歴史は覆い隠され、国家防衛とそのための基地の必要性が前景化するのは、基地経済の活性化や再開発といった積極的な価値が喧伝されることによって生じた場所感覚による。

ロ　本来的に場所は個人の実践や経験に根差したものだが、時間の経過とともに集団的・社会的な意味を帯びるとそこに新たな価値体系が形成され、その結果、境界を無効化し場所感覚が拡張されていく。

ハ　近世までは中山道の宿場町の一つだった軽井沢が高級避暑地として知られるようになったのは、外国人の実践を日本の上流階級が模倣したことで形成された場所感覚によるものであり、地名に象徴されるように空間的な拡張も生じている。

ニ　仏教徒やキリスト教徒にとって、場所感覚が信仰と一体化した結果、聖地が世界中いたるところに存在することになったように、人間が特定の解釈をほどこして意味を与えた社会的な場所の確立に宗教も大きな役割を果たしている。

ホ　近代になって沖縄の墓地の意味が、地域のつながりを基盤に共同体の指標として村落や県、国といった様々なレベルで付与されていったように、場所感覚はさまざまな地理的規模が入れ子状に重なっている。

(四)

次の文章は、人間存在における生と死についての考察である。新型コロナウイルス感染症のパンデミックが私たちの認識になにをもたらしたかに留意しつつ、あとの問いに答えよ。

生も死も、つねに特異なものの生であり死である。生にも死にも、一般性など存在しない。これらに一般性があるとすれば、それは、生と死が特異なものの対象性から分離されたときである。つまり、われわれは、絶えずこうした分離をし続けているので、生と死を一般概念として有することができるのである。ということは、死の観念の方は、特異なものの対象性ゆえに各個の人間のうちでまったく異なることになる。では、何故、〈死〉という一般概念は、上述したような分離という仕方で人間のうちで成立するのであろうか。そこには、おそらく二つの理由があるように思われる——(1)死という概念は、人間が有する比較の技法の最大の効果の一つであろう。物を評価するための比較という方法は、われわれにとっては、物の最良の理解の様式として信じられている。人間は、まさに比較に長けた動物なのである。というのも、人間の本性は、根源的にニヒリズム性に存する以上、比較によって相互の間に欠如や否定を見出すことに長けているので、これによってそれらの物の認識が進捗すると容易に信じることができるからである。つまり、比較による肯定は、つねに否定や欠如を媒介することなしには成立しえないということである。人間は、物を比較する度に、実はこのような仕方で生の欠如としての〈死〉についての一般概念をつねに形成し続けていることになる。(2)死の概念は、身体の多様な触発から精神において一様に形成されるものである。これは、言わば(1)における比較という精神の作用を今度は身体の触発についての観念の側面から言い直した事柄でもある。人間身体は有限な存在であり、同様に身体の触発によって形成される表象像も有限である。ということは、判明な表象像を形成しうる触発以上の変様を受けた場合、人間精神は直ちに混乱し始め、それゆえ些細な差異を表象することができず、例えば、そこから人間全体の一致点のみを表象しようとするであろう。[1]〈死〉の一般概念も実はこのように形成されたものである。すなわち、生成から〈生〉の一般概念が成立するのと同様、今度は消滅から〈死〉の一般概念が形成されるわけである。こうした人間精神と並行論的関係にある人間身体は、もはや自らのそれぞれの変様に対して無差異となり、したがってここでは区別なしに不活発なものによる触発しか生起しないような単なる〈受容体〉となるしかないであろう。つまり、こうした意味での悪しき抽象概念の発生的要素は、まさに消滅する身体にあるのだ。

さて、死体は、それがこうした〈死〉という一般概念のもとで知覚されるなら、その〈生〉の持続上の同一性やその完結性を伝えるものにしかならない。死は、生が有するさまざまな可能的なものの消尽であり、したがってそれらを媒介として必然性の様相をともなうことになる。例えば、サルトルは、次のように述べている——いくつかの積木の破壊に例えられる死は、「(……)私のあらゆる可能性の無化として、つまりそれ自体もはや私の諸可能性の一部をなさないような無化として把握されうるのである。それゆえ死は、世界における現前をもはや実在化しないという私の可能性ではなく、むしろ私の諸可能な事柄についてつねに可能な、つまり私の諸可能性の外にある一つの無化である」。この言説は、スピノザの死滅の理解、すなわち「いかなる物も、外部の原因によらなければ、滅ぼされることができない」という言表にきわめて近いであろう。それは、その本質に存在が含まれずに存在するもの、つまり様態の絶対的な必然性である。この様態の概念が、後のサルトルのような、〈実存〉の理解の仕方の基礎となりうるのである。死についての必然性の現働化が、まさに〈死体〉である。この意味で死体は、間違いなく〈死〉以上のものである。というのも、死体は、一つの物の状態である限り、死を必然的で決定的な〈出来事・効果〉として産出するからである。では、こうした必然的な〈死〉を媒介せずに生だけを考えて、生きることができるであろうか。このことは、たしかに死を恐れることなく、より多くの喜びの諸経験のもとでの生の充実をもたらすであろう。しかし、そんな経験だけから一つの生が成立し続けることなどありえない。というのも、一つの生には必然的に悲しみや憎しみ、恐怖や絶望などの諸感情に刺激されうる無限定な時間が存在するからである。こうした感情の増大は、実はそれらの反対感情——喜びや愛、希望や安堵、等々——が有する度合の減少とともにしか成立しえないのだ。すなわち、こうした感情の度合の増大とともにその都度多様な死の観念が、しかし非十全な形相を有する分子状の死の観念が形成されるのである。

では、つねに死を媒介にして生を考えること、これは何を意味するのであろうか。それは、言わば死を絶えず目的化して、生をその結果にすることである。死の表象は、実は人間にとっての生の表象の仕方の一つである。こうした意味での死の価値は、一つの生の表現である限りにおいて、その生を構成するものとして考えられうるであろう。しかし、たとえそうであったとしても、[2]死は生の目的ではなく、つねに生こそが目標そのものでなければならない。例えば、

「生物多様性」とよく言われるが、これと同様に人間の一つの生もたしかに多様でなければならないであろう。というのも、生物という概念のうちには多様性という特性が必然的に、つまり分析的に内含されているからである。同様の仕方で、生成もその消滅も、生もその死も、実は多様でなければならないのだ。すなわち、死の観念のうちには、多様性という特性が必然的に含まれているのである。言い換えると、それは、死に方の多様性であり、また同時に多様な外部の原因による消滅の仕方を意味している。自己の死を考えることがより少なければ、人間はそれだけより多く自由で幸福であると言える。言い換えると、死を媒介にして生を考えることと死の媒介なしに生を考えることとの間には、単なる逆比例の関係以上の、共立不可能な関係性があるように思われる。

＊

さて、この新型コロナウイルス禍に固有の恐怖とは何であろうか。それは、端的に言うと、一様の死に対する感情である。この死の一様性あるいは死の全体性が、すなわち一つの原因による死しか存在しえないことがわれわれにとっての最大の恐怖となる。死は、生と同様にたしかに多様でなければならない。逆説的ではあるが、これが実は生の充実を表象する一つの側面であるように思われる。外部の多様な原因あるいは多様な病因による死は、むしろ充実した生の多様性を表現しているのではないだろうか。人間は、自らを死せる存在であると理解する動物であるから、予め死を想ってよりよく生きなければならないと言われる。つまり、生のうちに死の観念を織り込んで生きることが大事であるということである（メメント・モリ）。しかしながら、[3]これは、やはり愚鈍な弁証法的思考の一種にほかならない。そうした生は、最初から死と比較された生でしかないからである。それでは、問題は、いったいどこにあるのか。

生存の様式に多様性があるように、たしかに無数の死に方がそれに対応して存在しうるであろう。考えるべきことは、かつてよく言われたような、死の経験不可能性などではなく、むしろ死の実在的多様性である。すでに述べたように、死体になる前の死はたしかに経験され、身体の変様として存立するのではないだろうか。死は、単に生の否定や欠如ではなく、まさに実在的無力能として理解されるべきではないのか。あるいは死とは、むしろこの実在的無力能の一つの象徴にすぎないのではないか。そして、これが実はスピノザの考える死ではないのか。ここで考えられる死は、けっして神秘化されたり非経験化されたりしない。これは、つねに死の概念やそのイメージを媒介にして〈よりよく生きよ〉といった[4]道徳的命令とはまったく異なる意味での死についての思考である。例えば、国家の諸装置のなかに配分された戦争機能は、端的に言うと、可能的には人間の一様な死を、つまり戦死を強制し肯定するだけのもの、あるいはむしろ潜在的にはこうした一様な死をサポートするような生の体制である。それは、ニヒリズムにおけるまったくの灰色の午後の時間を過ごすような、一様な生き方を強要されることなしには成立しえない。しかしながら、もし人類が歴史的に変化（あるいは進歩）してきたと言えるなら、それは、一方では人類が多様な生の形態を生み出してきたからであるが、逆に言うと、他方ではそれによって多様な死に方の外部原因を同時に産出し発明してきたからである――交通事故死、墜落死、脳死、被曝死、焼死、病名の細分化、等々。多様な死に方は、多様な生の実在がなければ不可能である。さて、戦時下という理解のもとで、現在、新型コロナウイルス禍において一様な死に方への恐怖――そして、これを回避する手段（ワクチン、治療薬、等々）への希望――が最大の問題となっている。このコロナ禍においては、いかなる哲学も〈パンデミック〉という無際限な大域的様態の原因について思考せずに済ますこと、つまりこれについて無差異であることは不可能であろう。何故なら、それは、或る未知なる不確実なものが内含されているがゆえに形成された、本性的にも時間空間的にも指定不可能なものだからである。というのも、哲学の思考がこうした未知なる決定不可能なものに積極的に触発されなければならないのは、それがつねに哲学の存在根拠の諸要素にほかならないからである。それは、あたかもまったく別の仕方で大地へと浸透してきた非・局所的な大気現象、人間の主に呼吸に関するだけの気象現象のようである。この指定不可能な或るものは、実際には、一方では一様な死への恐怖を産み出すが（＝生命の意識）、それと同時に他方では相変わらずの固着化した習慣や記憶の秩序のもとで絶えず掻き消されることになる（＝経済への意志）。それにもかかわらず、それは、たしかに群衆の間に離散の諸価値、可変的な距離の必然性、局所の絶対性をもたらしている。[5]気候変動の先触れとしてのこのコロナ禍におけるわれわれの対応は、すべて来るべき決定不可能な諸命題に対する予行練習となるであろう。

（江川隆男『残酷と無能力』による）

問二十一　傍線部1「〈死〉の一般概念も実はこのように形成されたものである」とあるが、ここで言う「一般概念」の「形成」とはどのような事態か。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　われわれが人間の死を、その特異な対象性から分離し、判明な表象像を形成しうる触発以上の変様を精神が受けることによって身体が無差異となり、人間全体の一致点のみを表象する結果、消滅から〈死〉の一般概念を形成してしまうこと。

ロ　われわれが人間の死を、その特異な対象性から分離し、身体の触発によって形成される表象像と無関係なまま、欠如を媒介とすることなく〈死〉についての概念を形成する結果、精神・身体の変様を認識しない悪しき抽象に陥ること。

ハ　われわれが人間の死について、その特異な対象性を肯定する代わりに身体の触発によって些細な表象像を形成し、区別なしに不活発なものによる触発しか生起しない〈受容体〉となる結果、消滅から〈死〉の一般概念を形成してしまうこと。

ニ　われわれが人間の死について、その特異な対象性を肯定する代わりに生の欠如という否定性を見出し、身体の多様な触発から、微細な差異ではなく全体の一致のみを表象する結果、精神・身体の変様を認識しない悪しき抽象に陥ること。

ホ　われわれが人間の死について、その特異な対象性を肯定する代わりに生の欠如や否定を見出すことにより、精神と並行論的関係にある身体の単なる〈受容体〉と化す結果、身体の多様な触発を〈死〉の抽象的概念に還元してしまうこと。

問二十二　傍線部2「死は生の目的ではなく、つねに生こそが目標そのものでなければならない」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　死が私の諸可能性の外にある一つの無化であり、生の様態の絶対的必然性であるとしても、一つの生には諸感情に刺激されうる無制限な時間が存在する以上、外部の原因による死の観念を予め組み込んで生を考えるべきではないということ。

ロ　死が私の諸可能性の外にある一つの無化であり、生の様態の絶対的必然性であるとしても、一つの生が多様でありその死はつねに分子状の観念である以上、死を生の条件とし目的化して生きるべきではないということ。

ハ　死が私の諸可能性の外にある一つの無化であり、生の様態の絶対的必然性であるとしても、死の観念のうちには多様性という特性が含まれている以上、より多く自由で幸福な生を獲得するためには死を媒介にせずに生きるべきではないということ。

ニ　その本質に存在が含まれずに存在する様態の絶対的な必然性としての死は、〈実存〉の理解の仕方の基盤となりうるが、生もその死も実は多様である以上、生と共立不可能な関係にある死を目的化して生きるべきではないということ。

ホ　その本質に存在が含まれずに存在する様態の絶対的な必然性としての死は、〈実存〉の理解の仕方の基盤となりうるが、死が生の表現である限りにおいて生の構成要素である以上、死を目的化して生を結果にすべきではないということ。

問二十三　傍線部3「これは、やはり愚鈍な弁証法的思考の一種にほかならない」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　新型コロナウイルス禍は一つの原因による死しか存在しない全体性への恐怖を生んだが、この感情が予め死を想ってよりよく生きることを促すだけであるならば、その思考は死を理解しようとしない動物的な弁証法に過ぎないということ。

ロ　新型コロナウイルス禍は死の一様性に対する恐怖の感情を生んだが、この感情がつねに生のうちに死の観念を包含して生きることに帰着するならば、その思考は生の認識における死の媒介を不可避と考えるありふれた弁証法に過ぎないということ。

ハ　新型コロナウイルス禍は一つの原因による死に対する最大の恐怖の感情を生んだが、この感情が生と同様に多様でなければならない死の充実を表現するならば、その思考は生を最初から死と比較することができない贋の弁証法に過ぎないということ。

ニ　新型コロナウイルス禍は一様にして全体的である死という固有の恐怖を生んだが、この感情が充実した生を表現している外部の多様な原因による死を意味するならば、その思考は自らを死せる動物であると理解する逆説的な弁証法に過ぎないということ。

ホ　新型コロナウイルス禍は一様な死の全体性という恐怖の感情を生んだが、この感情が生と同様に多様なものでなければならない死の原因を一つしか見ないならば、その思考は生の充実を死の充実に織り込む人間固有の弁証法に過ぎないということ。

問二十四　傍線部4「道徳的命令とはまったく異なる意味での死についての思考」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　死を生の否定や欠如と見なす思考は、一様な死をサポートする生の体制たる戦争機能への転用を避けられないのに対し、死を経験可能な多様性のプロセスと見なし実在的な無力能と理解するとき、その思考は国家の諸装置が強いるニヒリズムに捕獲されえぬ特性をもつ。

ロ　死を生の否定や欠如と見なす思考は、死の経験不可能化や神秘化へつながりかねず、可能的には一様な死の強制を許すことになるのに対し、死を生存の様式と同様に多様性において理解するとき、その思考は国家の諸装置の中に配分される戦争機能の特性をもつ。

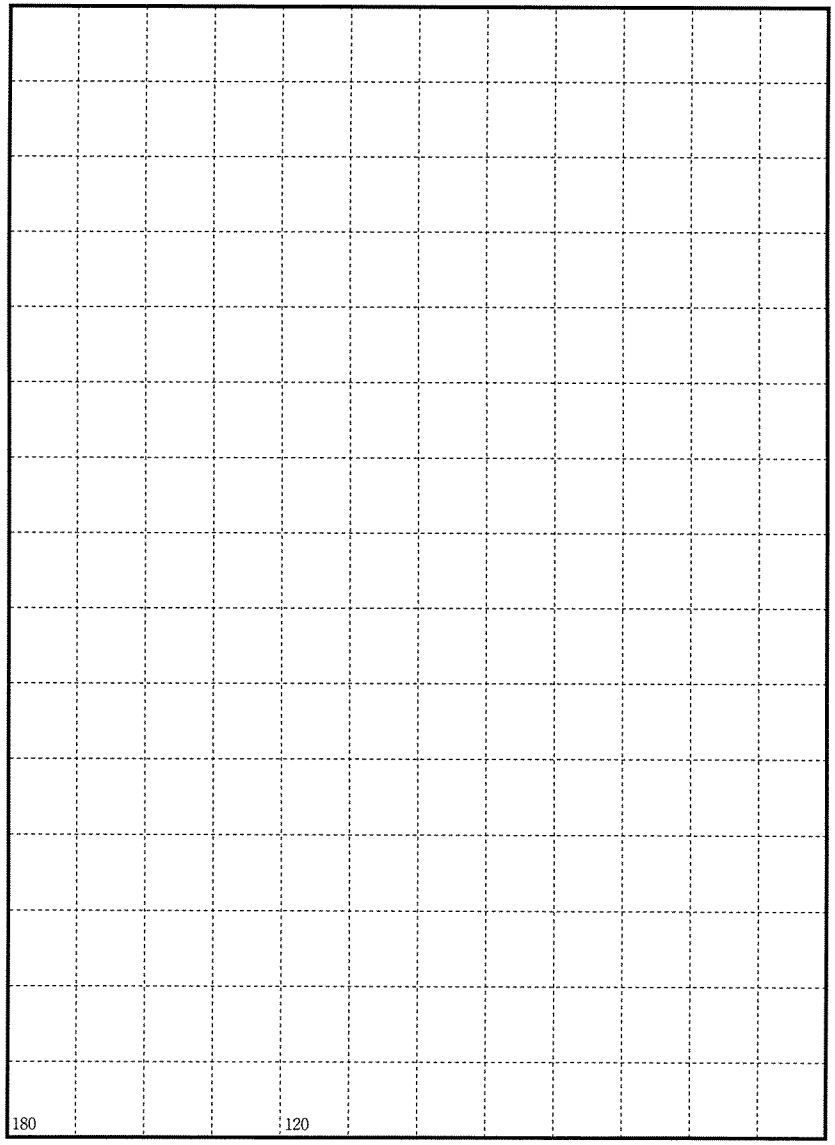
ハ　死を生の否定や欠如と見なす思考は、ニヒリズムにおけるようなまったくの灰色の午後の時間を過ごすような一様な生き方を強要されることになるのに対し、人類の歴史的変化を考慮するならば、その思考は多様な死に方を肯定できない実存の特性をもつ。

ニ　死を生の否定や欠如と見なす思考は、死の概念やそのイメージを媒介として〈よりよく生きよ〉といった道徳的命令の根拠となりかねないのに対し、死を死体になる前の身体の変様と見なすとき、その思考は生の体制を潜在的にサポートする特性をもつ。

ホ　死を生の否定や欠如と見なす思考は、人間の一様な死たる戦死を肯定し強制するだけのものになりかねないのに対し、多様な死に方の外部原因を産出し発明してきた人類の歴史を考慮するならば、その思考は死を多様な生のイメージとして捉え直す特性をもつ。

問二十五　傍線部5「気候変動の先触れとしてのこのコロナ禍におけるわれわれの対応は、すべて来るべき決定不可能な諸命題に対する予行練習となるであろう」とある。本文中で展開された生と死についての考察を踏まえつつ、ここで著者が言う「予行練習」とはどのようなことであるかを、**一二〇字以上一八〇字**以内で記述せよ（解答は記述解答用紙の**問二十五**の欄に楷書で記入すること。その際、句読点や括弧・記号などもそれぞれ一字分に数え、**必ず一マス用いること**）。

【下書き用マス目】（この下書きは回収しないので、解答は、**必ず記述解答用紙に記入すること**）



〔以　下　余　白〕

国語　記述解答用紙

（記入上の注意）
受験番号・氏名は下の二つの欄に記入すること。
解答は右に指定された太枠内に黒鉛筆（ＨＢ）または
シャープペンシル（ＨＢ）で書くこと。
枠外・裏面には何も書かないこと。

問二十五の解答にあたっては、句読点や括弧・記号などもそれぞれ一字分に数え、必ず一マス用いること。

問十
雖万万不及緹縈

問十三
A
B

問二十五
120
180

〈2025 R 07192012〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意）所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

国語採点欄

a 25　b 25　13　10

〈2025 R 07192012〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意）所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。